
最高の思い出

椿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最高の思い出

【Nコード】

N6604I

【作者名】

椿姫

【あらすじ】

十一番隊隊長、更木剣八。彼女の唯一憧れる人物『八千流』。その人物とは一体どんな物語があったのだろうか。彼女の昔の物語が今明かされる。（剣八によたです。八千流はオリキャラ。それでもOKな方のみ、どうぞ）

過去　く　出会い編　く　（前書き）

「過去」は剣八語り。

剣八は女の子設定。

「現在」からは誰がか語ります。

過去　く　出会い編　く

『餓鬼。一緒に来るか？』

それは、俺が貰った最高の言葉。

二百年前位前のことだ。

赤ん坊の頃に俺は捨てられて、持ってた一振りの刀を頼りに人を斬って生きて来た。

一人で生きて来た。怖かった、恐ろしかった。

悲しかった、虚しかった、淋しかった。

そんな時、『あの人』は俺の前に現れてくれた。

「おい。そこに誰か居んだろ。出て来いよ」

まだ、俺はやちる位の子供で大人と戦って勝てるほど強くもなかったから、俺はビクビクしながら出て行った。

男だった。黒い髪を適当に結んでみすぼらしい格好で、刀を持っている。『更木』では珍しくもない格好の男。

「餓鬼、か」

男は自分の持ってた食糧を少し、こっちへ抛ほうつて来た。

「おら、やるよ」

「え…」

まさか、貰えるとは思わなかった。だって、食糧はとても貴重だったから。

「やるっつってんだ。ありがたく貰っつけ」

「あ…あり、が…とう」

俺が礼を言うと男は笑って、自分の隣に来るように俺に促す。^{うなが}

俺が隣に行くと男はガシガシと俺の頭を撫でてくれた。優しいとは言い難い手つきだったけれど、嬉しかったんだと思う。

「餓鬼。名は？」

「…無い。あんたは？」

「俺か？俺は『八千流^{やちる}』だ」

「や…ちる…？」

「おう、八千流だ」

俺は八千流と少しの間、一緒に座っていた。ただ、一緒に居ただけだと落ち付けた。

「餓鬼。お前、家あんのか？」

「無い…」

「お前は何にもねえな」

よいしょと八千流は立ち上がり、歩きだした。十歩ほど歩いたところで八千流は気が付いたように訊いて来た。

「餓鬼。一緒に来るか？」

それは当時の俺に取って、最高に嬉しい言葉で、俺は二つ返事で付いて行った。

過去　く名付け編く

「八千流！」

「んだよ……」

「見てくれ！」

そう言つて俺は紅い花束を八千流に見せる。

「！ばつ、おまつ！それ、彼岸花だぞ！」

「彼岸花？」

「かぶれる花だよ！さつさと捨てる！」

「えー…せつかく綺麗なのに……」

そんな、和やかな会話が出来るなんて思つてなかった。

むー、と脹ふくれている俺に無視して、八千流は呟く。

「彼岸花…か……」

「どうかしたのか？八千流」

「『彼岸』でどうだ？」

突然、そんな事を言つてきた。

「？なにが？」

「何つて、お前の名前だよ。いつまでも『餓鬼』じゃ、いけねえだ

る？お前も女の子なんだしよ」

「名前……」

「ああ。『彼岸』だ。どうだ？」

名前……。

「嬉しい！それで良いよ！」

それから、俺は『彼岸』と呼ばれていた。でも、その名前は数年後、捨てることになるのだけれど……。

現在 へ全部壊して へ(前書き)

ルビが読みにくい人は文字を「大」にして見て下さい。

現在　　く全部壊して　　く

全部壊して

そう言ったのは、誰だったか。

+ 始まりの終わり +
始まっ　終わる
生きて死ぬ。

何でもそう。誰だってそう。

それは運命。

万物が逆らえない壁。

その筈なのに、あいつは壊して見せた。

俺の目の前で。すぐ傍で。

金魚掬いの網。すぐに破れてしまう金魚掬いの網の様に、簡単に。
でも、俺にはあいつの様な強さはないから。

全てから逃げた。逃げて逃げて、『更木』に辿り着いて野良犬の様に生きて来て。

出会った。

まだまだ小さい餓鬼で、すぐに死んじいそうだった。

でも、そいつは底抜けに明るくて、世界を恨んじやいなかったと思う。

少しの間、一緒に過ごして。

俺は兄貴から戻れと言われたから、そいつを捨ててのこのこと帰って来た。

泣いて…居るだろうか。

……笑っていてほしかった。

あいつの笑顔は暖かかったから。そう…まるで陽だまりの様に。

今日も思う。お前は元気だろうか…。泣いていないだろうか…。笑

つてくれて、いるだろうか…。お前は今、幸せだろうか…。そんな風に思う。これからも。

ありがとう…。お前に会えて良かった。

…お前が、いてくれて良かった。

ありがとう…。ありがとう…。ありがとう

“彼岸”

「……………」

「？剣ちゃん？どうかしたの？」

「ん…。誰かに呼ばれた様な」

「隊長！。何やってんスか！？早く来て下さいよー」

「ああ」

そう、返事をしながらも、剣八は空を見上げる。西の空が血の様な…彼岸花の様な鮮やかな紅に染まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6604i/>

最高の思い出

2010年10月8日13時38分発行